

謙虚に考え続ける 整形外科医に必要なこと

川口善治*

「若手が頼れる手術書」を目指して

——今回本誌増大号では、川口善治先生に「手術に効く！機能解剖×アプローチの極意」をご企画いただきました。

川口 本特集では、日々臨床の最前線で執刀されている新進気鋭の先生方にご参画いただき、各アプローチについて、機能解剖から手術手技、さらにピットフォールまで詳しく述べていただいています。若手の先生方が、これを1つの拠り所にして手術に臨むことで、できるだけ早い段階で手術が上達することをねらいました。

手術において、失敗経験がまったくない人はいないと思います。私自身も数多く経験してきましたし、おそらく誰にとっても避けられないものです。実際に失敗して初めて気づくこと、理解できることがある。そうした経験も含めて伝えることが、若い先生方にとって非常に有益な情報になると考えています。

今回ご執筆いただいた先生方は、いま現場でバリバリと手術をしておられ、さまざまな経験を積んできた方ばかりです。自分が苦労した点、注意してきた点を各アプローチに絞って、かなり実践的かつ網羅的に書いていただいています。それを

若い世代の先生方に有効に活用してもらい、そこにこの特集のねらいがあります。

予習・実践・復習で 手術は「自分のもの」になる

——本書を読むタイミングは、いつがよいでしょうか。

川口 まずは、手術が決まったときですね。予定手術がほとんどだと思いますので、術前に一度読んで、手術全体の流れを頭に入れる。そして実際に手術に入る。その後に、もう一度読む。

おそらく一度読むだけでは、十分に理解できない部分があると思います。しかし実際の手術を経験したあとに読み返すと、「ああ、こういうことだったのか」と理解できるようになる。そういう内容が、本書には書いてあると思っています。

手術というのは、事前に手順を考えていても、現場ではその通りにいかないことがたくさんあります。十分に理解できていなかった部分が、実際の手術で明確になる。そのあとに復習として再度読むことで、内容がより深く身についていく。予習、実際、復習という流れを繰り返すことで、手術は徐々に自分のものになっていくのだと思います。

*富山大学医学部整形外科

先達から学び、基本を繰り返すということ

——先生ご自身も、そうしたプロセスを経験されてきたのですか。

川口 そうですね、私は脊椎を専門にしていますが、入局したときの教授であった辻 陽雄先生が脊椎外科の専門家で、単著で立派な手術書を書いておられました、『基本腰椎外科手術書』(南江堂)という書籍です。辻先生と一緒に手術に入るときには、必ずその本を読んで臨みました。

実際に手術をしてみると、「書いてあることを本当には理解できていなかったな」と気づくことがあります。そこで、もう一度読むと今度は理解できるようになる。そうしたプロセスを経て、職人が手に職をつけるように身に付けていったという経験がたくさんあります。本特集も、読者にとってそういう1冊になってくれたらいいなと思っています。

本特集で扱っているアプローチは、整形外科で比較的よく行われる手術です。難しい手術というのはこの基本の応用ですから、まずはこれをしっかり頭に入れて繰り返すことで、応用も身につけてくる。そうすると、手術に対する恐怖感も少なくなってくると思います。ただし、慣れすぎないことも大切です。1例1例違うという意識を持ち続けることが重要だと思います。

驕らず、謙虚であることが外科医の基本

——コラム、また本文においても、心構えに関する執筆の先生方のご記載が印象的です。

川口 外科医の中には、「自分が患者さんを治してあげた」という感覚になる医師もいます。私はそうした考え方が嫌いです。

もちろん、医師としての仕事に対する自負はあっていいと思います。でも、「自分が治した」のではなく、その治療に自分がかなり関与した、というだけ。実際に治ったのは、やはり患者さん自身の力です。自分はそこに手を貸させていただいた、



川口善治 氏

富山大学医学部整形外科・教授

1988年4月－1989年3月 富山医科薬科大学病院勤務(研修医)。1989年4月－1990年3月 長野県立須坂病院整形外科勤務。1994年3月 富山医科薬科大学大学院修了(医学博士)。1994年4月 富山医科薬科大学整形外科助手。1994年10月－1995年7月 スウェーデンイエテボリ大学(研究休職)。1995年8月－1996年3月 富山医科薬科大学整形外科助手。1996年4月－2005年3月 同大学・院内講師。2005年4月－2008年3月 同大学・講師。2005年10月 富山大学医学部整形外科講師(施設名称変更)。2008年4月－2009年5月 富山大学附属病院整形外科臨床准教授。2009年6月 富山大学医学部整形外科准教授。2009年8月 富山大学附属病院整形外科診療教授。2010年2月－2018年2月 富山大学附属病院初期研修センター副センター長(兼務)。2016年4月 富山大学附属病院痛みセンター副センター長(兼務)。2019年9月 富山大学医学部整形外科教授。2022年4月 富山大学附属病院痛みセンターセンター長(兼務)。富山大学附属病院病院長補佐。現在に至る。

というくらいの気持ちでいるほうがいい。

驕った気持ちになると、いつか必ず足元をすくわれる。外科医は常に謙虚で、1例1例違うという姿勢を持ち続けるべきだと思います。

テクノロジーと向き合いながら 医師を育てる

——ロボット手術については、どのようにお考えですか。

川口 ロボットがなくても手術ができる人が、より安全性を高めるためにロボットを使うべきだと思っています。ロボットがないと何もできない医師を育ててしまっただけは意味がありません。

テクノロジーが進歩すると、人は考えなくなると言われることもあります。確かに気をつけないうえなうあります。ただ、今の時代にテクノロジーを抜きにして、例えばX線写真2枚だけをもって診断や手術計画を立てるというのは現実的ではありません。

大切なのは、なぜこの方法で手術をするのか、なぜこの手順なのかを若手と一緒に考え、ディスカッションしながら進めることです。そうすることで、次の新しいテクノロジーが出てきたときにも、それを主体的に使いこなせる医師が育つのではないかと思います。

「考えているかどうか」が 手術の上手さを分ける

——先生が考える、手術が上手い医師とは。

川口 手術数の多さではありません。どれだけ考えて手術をしているかが一番大事だと思います。2,000例やっても、考えずに流してやっていたら、上手くはならない。1例1例きちんと考えていけば手術は上達します。

手術前日就寝前に必ず頭の中で流れをシミュレーションします。皮切して展開してスクリューを入れて……神経の圧迫を取り除いて閉創して……その手順を繰り返し繰り返し頭の中で再現します。それが一番のトレーニングであり、勉強になると思います。

「できるようになった」と 思ったときが、危ない

——最後に、本特集を手にする若い先生方へ、あらためてメッセージをお願いします。

川口 術前にきちんと手術計画を立てる。前日に頭の中で手順を確認する。朝ご飯をしっかり食べて、病院に行く(笑)。私の場合はいつも手術前に必ず患者さんに挨拶をします。8時過ぎに手術室に入りますが、7時半前に病棟に行って、カンファレンス前に「今日、手術をさせていただきます。よろしくお願いします」。挨拶をすると、やっぱり患者さんの気持ちを裏切ることにはできないと思いますよね。

手術に入れば、思いどおりにいかないこともあります。そういうときに気持ちの余裕があるかどうかで、周囲への接し方も、判断も変わってくる。手術を終えたら、患者さんまたは患者さんの家族のところへ行って「終わりました」と伝える。そして、できればもう一度本を読み返して、その日の手術を振り返る。

その繰り返しの中で、自然と手術は上達していくと思います。ただし、先ほどもお話したように、「できるようになった」「もう大丈夫だ」と思った瞬間が危ない。そこで驕ってしまうと、必ずどこかでつまづく。外科医である以上、常に謙虚に、1例1例と向き合い続ける。その姿勢を、ずっと大切にしてほしいと思います。

(収録：2026年4月/進行：本誌編集室)